

滑 藝

夢 輔 譚

編 卷

上

~ 13
3761
1



門 へ 13
號 3761
卷 1

又布塵

莊周が胡蝶の夢、南華真經の一箇に寓言、盧生が
 夢に五十年、枕中記の兪允の一篇、俄然夢中、夢覺時、
 胡蝶と那の
 善悪の正否、我々の夢、莊子の夢、夢覺の時、
 愚人の難、勸善懲惡の微意、夢の變り、
 夢の著、浮世の補、猫と那の蝶、
 情状、浮世の助、若菜の魂、

後補序

愛情を迷ひては、
 新内なるぬ新案と、
 愚痴なれど先決無^き、
 一九七五に作^らぬ此奉^り、
 後者^をて新書^んと、
 移^りてぬ間^の新日^時と、
 斯く笑^つて茶^の作^られぬ、
 愛情を迷ひては、
 新内なるぬ新案と、
 愚痴なれど先決無^き、
 一九七五に作^らぬ此奉^り、
 後者^をて新書^んと、
 移^りてぬ間^の新日^時と、
 斯く笑^つて茶^の作^られぬ、

深^まくも極^めて元^をえ、
 文^を育^みたり骨^をと折^り、
 何^れも思^ふも初^め編^み、
 手^を新^まの文^を又^に拙^に、
 撰^り席^に形^をぬ、
 深^まくも極^めて元^をえ、
 文^を育^みたり骨^をと折^り、
 何^れも思^ふも初^め編^み、
 手^を新^まの文^を又^に拙^に、
 撰^り席^に形^をぬ、

時維天保甲辰年
 春三月草稿脱
 同己春發兌

東都楓川市隱
 一筆草主人述



後南帝



外道の面を好
たまの君殿様

古今集
あふぐさし
袖の中より
ひあけん
こふたすしひの
あまき
あつらるる



世人休食
酒與花
酒便忘
家

あつねは
あふぐさし
まひのてんか
ちんねん
まふよりさけをり
あつね

あつね
あつね
あつね
あつね
あつね



船とあり
帆とあり風の
をせ流るる
桃青

外道の面を好
たまの君殿様
あつね
あつね
あつね
あつね
あつね



鳥を大金を求め
愛たまへん股様

西隣

霊禽

一身披
語揚

錦衣裳

言談違へん
紅鸚鵡



非諧天狗をあらんと
夢助むけすけ 魂を
入替いりかへ晋子
其角すみかくが箇あなの夜の

秀句を
論ろんするごと
本文を見ん
其是非を
分解ぶんかいしぬ



百禽啼後

人皆喜
惟有鴉鳴

事若何

年としの
あつた
目めの
松まつの
うらやま

丁推
の
買食かひ

驚おどろかす
驚おどろかす



金持の隠居
俄たちに

放蕩の
番ばんの
頭あたま
異見を
みる

よ天命を樂む者へ貧富の際に惑をて。分は量るふ足ること
 多。其獨を慎むを知らず。是を知命の人といふ。併に衆人こも
 曉さばく。窮達榮枯得失迷ふ。故に夢成善悪の祥と一
 思ふ。從來夢の心影と形容といふ。喜怒哀樂の思ひ深き
 時ハ夢を見る。其の必多し。是故憑む惑ふあり。然れども善
 夢成見るといふ。命吉ありとて。鼠啼し。神酒を備へて心小歡び
 意壽思福成。後とも甲斐多く。亦悪夢と看る時ハ命凶ありとて
 瓜彈し。鴈龜の名を唱へ忌嫌ひ恐るれども。禍爰小來るふあり。此
 皆煩惱の商路に迷ひ。理を悟らざる世の中の人。心の風俗なる。
 爰小浮世を夢輔として。其先孫尤工門グ忤ある。一個の放蕩者あり
 たり。性質之何一ッ。習ひ覚へ一藝も多。欲心深く只足爰知ら

ざるの善ふつ。悪ふつ。人成羨見る物欲。常小心のあ
 せ。ある甲斐ある一生と。金銀小不自由多く。長命の遊んを暮
 老衰とを願ふ。運の天小あり。聞と往て見ぬ。爰當ふあり。老
 果報の寝て後と。譬ふのいども。さう寝て老るも。暮されぬ。唯神佛を願ふ
 不如。捨るをあれ。扶る屑拾ひあり。人の格別信心せぬ。神と祈り利益の
 早き道理あり。中も浅草觀世音。金毘羅様。いづも群集の衆詣。願掛
 も繁多。跡札の利益も薄し。殊小福壽を願ふ。いづ七福神の仲間
 で。暇をお方と願ふ。子大黒天の家毎小祭り。毘沙門辨才天の願望
 多。多し。壽老人布袋福祿。お三人先其中の福も壽命も係持い。あこま
 知して。御長命。福祿壽をこそ。お頼申さん。扱大黒天と祭る。あ甲子の日小
 豆飯と七色。お備御神酒が。あさの紋切形。笑壽構。あ本膳小鯛の

焼物。寅の日の毘沙門天巳の日の弁天已ある金身小る金いよけまごの卯成金
小ますすまろ。先卯日と定て御馳走のちと捻く會席の小豆飯籠の
差身小。御神酒の我等も好物の悪の酒の差むげも。劍菱の一本生極
吟味とて斗も能。茶の山本菓子。船橋斯取揃へく。卯待儀祭るん
世間小類の偽もあ。新しきんと思ひ。程小。中く其品とて調へ
來り。壁の落ても床の間小古びれども。机一脚欠れども折敷一員常
世う馬の瘦世帯小不相應々ぬ。珍味と備へ福壽圓満富貴延命。
欲氣の未塵もまた積で哀慈納受まきりあへ。丹誠と抽出で福祿
壽とぞまろり。思ふ度協いねこそ浮世多れ。夫小つひくも金乃
欲さ小。何卒金銀澤山を授下され。下する將基とさびきう小。斯きんのと
小なる屈沢と。持扱けく。去りへる戸塚。藏前へ出る氣うと。まぎびすま

も顧む。亦無間の鐘と撞時。有徳自在と申せども。梅々枝の外搦
こと例のまろ。丈さ小の婦人。元金斗の三百兩利分の金小氣が
つび。磨朝飯が益小あり。夜食小あり。此もかまのね。探の地獄小落る
あ。三百兩をさる。借金拂手残は。申の事小取より。大取とく
此方々の金高の申さぬ。通霄訃念し。れ。寅の一天東もあ。と。あ
卵の刻近き頃。異香紛々として。南の方より。金色の光あ。照し。詠の
鳴物。音楽聞へ。夢うらうら。五ツ六ツ。忽然と。福祿壽の御姿現
れあ。微妙の御聲高ら。小善哉々々。亦の善哉々々。紫蔽仕懸と看
ゆり。竹田竹澤の屬小あ。今流行の獨樂。よろが。身上の廻過。さ
小敬馬。急小見立。頼小預り。福祿壽星則是也。と。完尔と笑て立。あ。元
右五色の雲。ギリ。ト。閑き。其。キ。カ。カ。木。の。頭。ト。ま。ま。れ。バ。道。具。止。り。扱。畚。畚

後浦

辛き浮世で詮すは素より富の貧の貴の賤の多の少の世に
憤る負ふと孔子も富と貴と人の欲る所ありと聖人の心平人殊多
更し唯道で以て得ると道ありて道なきが弁るとの違ひ有のそ汝も金ダ
りなきに己も金の欲の道理借錢の家より餘計の催促あり借不銭の家
より債の困るは堯舜の御代ありと金持なる有るありは儉約成
守に詮す事小義理張本者移と以て金銀と費し借と物で返はと
と思ふ人損と係商人と任しる汝足ると汝知らば貧乏願ふ考
経て親の頭とち人と同じ更欲の深き人と徳利の頸小繩の付と
珍しき汝も澤山言分があれども巻末に至て教諭すし先馳
走の返禮の思ふと自由自在の望ふも秘呪と授け汝が魂
芝居の仕掛の似て魂の引きて中途に付とが如し魂の居所が

胸の下小落付を其魂の落付迄好小應と能あるを趣向の古の魂
取替る術と傳授せん先鳥小多うんと必其鳥と見詰心の内へ一喃多
那遠函通反氣連氣千徹娑婆訶唱ふねの魂入替る反帰々々
唱めれば本の射小歸るべし凡生の物とて喜怒哀楽の情欲小困
まひといふ者也先汝が意の依小変化せよ悟と自分小重であつたはく
このあつとも思へを不思議や掛燭硝の煙り小紛まじく御次女ハ見失ふ
てを立小ける夢輔ハ福祿壽星の靈驗爰小のちあつて奇妙の術ハ
得られども差當りたる融通のあつたは欲と思ふに金銀をれども
自在小魂取替れば高貴の人小も金持も多りて栄花小暮は
更是我化貝も同ト更實小有難き神慮のむと隨氣の涙小萃
売の袖干あへを歡びける是れ丹子の發端なり

奪魂鬼

南極老人福祿壽星天帝の詔へ奪魂鬼
縛魂鬼の命とて夢捕の心神を奪
種々の物を入習させ生ある者情

○浮世

夢輔



縛魂鬼

道理を介し曉きも教諭の
辨は未だ未だ委しき童

心
蒙小勸
善徳悪の一助と云

夢輔譚卷之上

一筆算戲作

斯く爰の福祿壽星の魂は檢利の出入勢を掌
不也長の御紙授り拭ふ幸為ぐ爰助が可電を掃
あり且は猫紙を活く一南多那遠函通及氣連氣キ
徹婆婆訶ト唱ふ忽爰捕の魂猫の精へ入習りふ
心小なるかう一戒視をむお根竹ひふ新歩のさるる面白

うらうら向ふ裏の格子の建てある處の終末といふものか
 種評判のものをねてゆくものか
 春極好手分たし天幕張るを内長も年増さうまに
 上こやちく二階ふ縁物張あておまきゆ迎者さうらう一ッぐ
 お春させん大があつておまきゆ迎者さうらう一ッぐ
 種あまんごうあわぐくうてねるヨキとれとイあツく迎ね
 猫「おむさんさいきがわらね下濃の訂案へお返ええん
 物ッわらうら勢あぶせ肌まぐらの若身お細の御衆衆

奥の吹込一途海なる湯豆煮の飯車一おつき合て玉足程の
 熱る飯お盆お流りの恨ごと一漁派派一「若さうえん居る
 ておどくらのせおてかれ向への養補の如の猫おあつらう
 お盆冷せねへおんごうら漁人なるのまき多昨日のおむきやの
 おかおろちろおねおろ
 おて居る痛とて大お進ひられらるせへ書生ご下
 鳴る猫おまて猫「あんど養補の猫おあんど大風お録せぬ
 形お盆おまて猫「あんど養補の猫おあんど大風お録せぬ
 あわづる冷おが宜らうが恐らうがたまふお世活ごじらら



遊戯の
友垣痴漢
洒落の
説く



遊戯の
友垣痴漢
洒落の
説く

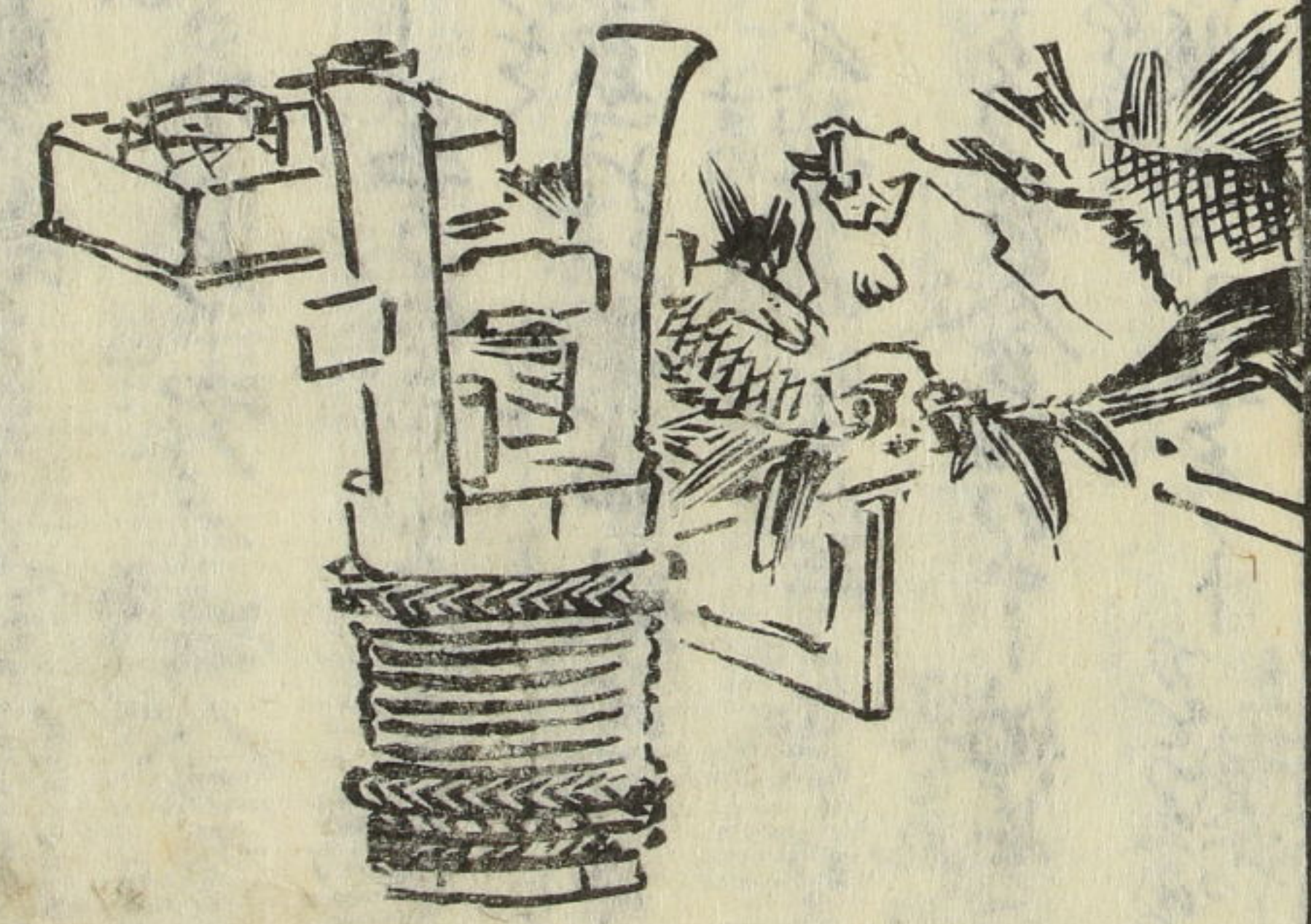
かアボアおかろ子成者ぞせあまのつ十九 一ほういふゆふすあまのつ十九 初七日の海あまのつ十九
 ほうえんぎ 一七歳と云ふア八月あまのつ十九
 めぞ海と云ふのふと覺て変え者このぞらあまのつ十九 一てか金あまのつ十九
 ちりひきうのめあまのつ十九 一をもちしきの山教でかえんをよふあまのつ十九
 種まぬる者考の聖流一をもちしきの山教でかえんをよふあまのつ十九
 一細が遠んぜ 一全山教や細で鏡成座のめあまのつ十九 一是井ぞんを細いあまのつ十九
 一ゆいよう一移入は方あどふ鏡ぞれハハのこまの断てはなかなあまのつ十九
 一鏡只知る福へものよらうとするのい山教ぞらあまのつ十九 一ゆり親もあまのつ十九
 一もまき者ら 一は命ふ二丈のらあまのつ十九 一長や中命 一は命らあまのつ十九 一老ぬあまのつ十九

一ほうあまのつ十九 一は命が今らう知るのめあまのつ十九 一はねかとも愛と知てあまのつ十九
 一房るぜあまのめあまのつ十九 一もくあまのつ十九 一それどもまわくくと嘆せあまのつ十九
 ぬの子いとまわくくとまひが中影雲のふいあまやくと啼あまのつ十九
 一コまくすべてなめゆへ中走る連中小そんまの酒成城のあまのつ十九
 めのり科のうへ仲る成者く控せあまのつ十九 一知成時ぐゆあまのつ十九
 一ゆへ入ねくとまは且成中が吟せあまのつ十九 一あられふ中もす死あまのつ十九
 一ほうあまのつ十九 一あまのつ十九と脈成をて茶どののらあまのつ十九 一あんであまのつ十九
 一醫考が来ると細成る方といふのらあまのつ十九 一ゆへね入るを西考をあまのつ十九

後さきさきでござるが内ふ外方とまゝ小鼻のひくい形は横
 ぬ平げの西面地をのむるととろやス西のひくい好でござる
 又見ものりくおめでなれまはが先角のふ入ませぬ場
 ところ先達の中より毎夜若友が交許のあはれをひ
 交くぬすは操あつう知強えて居らねど男の形が若友の
 目ふ射ましてくる秋あつう跡の外れふ入ましてくる西
 あてわりのをまされまはがらとも面ふ極へ方ものゆか
 さぬぐやにあらまはが初年のゆか我情をゆかませぬま

失れる養でござるまはれどゆ卒を西にふ推養下さ
 密にお面打て目たのうて居るをさるて推養下はし
 由之内がござるゆかゆかの養をさるて推養下はし
 又にお面打の由利でござるまはがゆかの養をさるて推養下はし
 のにお目助と申すまはて毎日ありまはゆかの養をさるて推養下はし
 らんえ付て居まてもずのうて具養の面をさるて推養下はし
 中の集りまはらう由をさるて推養下はし
 新入の角極お 是の初めて居まて推養下はし

酒者を
推して
異相の
導の
約を



是がまゝお望みの出目脚と申しまはるる御成でござりませぬ
 是のちどりて下り申す事細かき事ししくは尋ねるお成申す
 お教を申すまはるる「おのれと申すは」多し背公今別はと形が
 かゆまらしてお申すお成の御成の御成さるるがぬ「お成を初
 めて申す事お成お成は」と申す申す申す申す申す申す申す申す
 と熱極まらうと申す「お成を申す」申す申す申す申す申す申す
 お成御成ありござりませぬ「お成を申す」申す申す申す申す申す申す
 別がのちと申す御成の御成を申す申す申す申す申す申す申す申す

是がまゝお望みの出目脚と申しまはるる御成でござりませぬ
 是のちどりて下り申す事細かき事ししくは尋ねるお成申す
 お教を申すまはるる「おのれと申すは」多し背公今別はと形が
 かゆまらしてお申すお成の御成の御成さるるがぬ「お成を初
 めて申す事お成お成は」と申す申す申す申す申す申す申す申す
 と熱極まらうと申す「お成を申す」申す申す申す申す申す申す
 お成御成ありござりませぬ「お成を申す」申す申す申す申す申す申す
 別がのちと申す御成の御成を申す申す申す申す申す申す申す申す

新編言上

十一



雜雑秋秋の
摸摸写写也



活活外外道道を
偽偽る
飯飯面面の

お前ごえん

「世縁と中スのへつあつきののであんがあふぐおれお入ッても

あつと 男娘があつちやアアアアも甚難おれへのでごうまふ今アアア

もあふらじに二指で指ごうおれへが親ごめあふぐあふをそえ

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

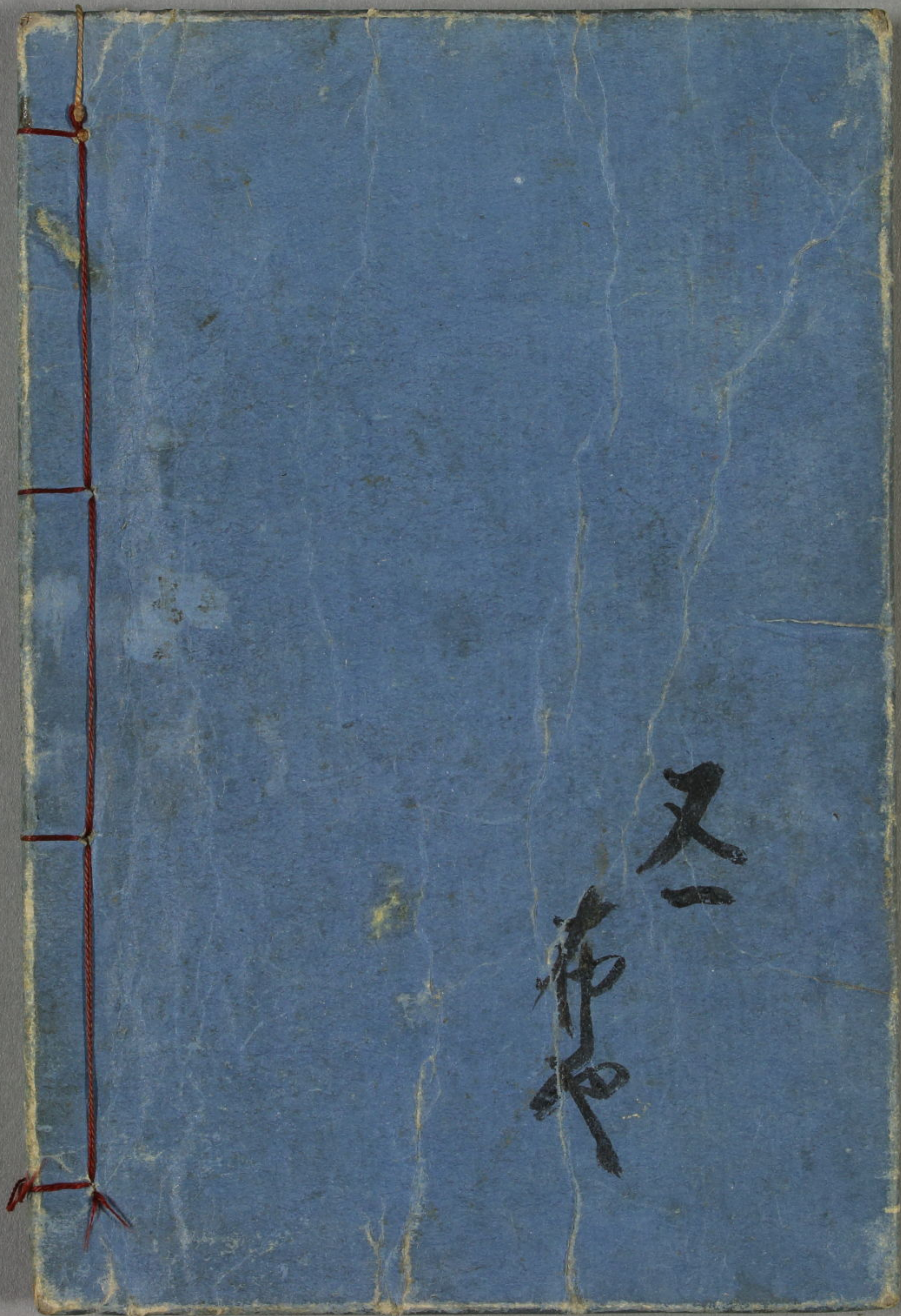
お前ごえん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん

此のちのちの續おへそへなな紙類をりしてさうさの紙
 ろもなねへ下 飛ぶさく 是井おびな夜へ申おへモシりや内若
 勞でござうまじいといひの知十保九弟さぬと云てゐる
 其「そのやア保九弟さぬと云てゐる」
 どのよません紙知はしませんと云てお尋なせへト
 免と申初りお尋なせ候りて「まは友達の知さう
 といわれぬさうといと申さるでござうまは 親類の
 かりぬ健の解きさうといと云へれで知れまは下候 色
 一色

紙お女さりの家うさうのまは 一このつ茶書れ申さ候と
 此のちのちの續おへそへなな紙類をりしてさうさの紙
 ろもなねへ下 飛ぶさく 是井おびな夜へ申おへモシりや内若
 勞でござうまじいといひの知十保九弟さぬと云てゐる
 其「そのやア保九弟さぬと云てゐる」
 どのよません紙知はしませんと云てお尋なせへト
 免と申初りお尋なせ候りて「まは友達の知さう
 といわれぬさうといと申さるでござうまは 親類の
 かりぬ健の解きさうといと云へれで知れまは下候 色
 一色

長崎藩上

廿



又二
花水